

講演師

神田織音さん

写真：神田織音



講談という伝統話芸で「成年後見制度」をお伝えします

「オレオレ詐欺、振り込め詐欺、手を変え品を変え、人の弱みにつけ込む詐欺事件が後を絶ちません。なかでも、判断能力のないお年寄りを狙った事件は断崖さわりないものです。これは、まだ記憶に新しい、認知症の高齢者を狙ったリフォーム詐欺事件のお話です」

「バン、バン！ 勢いよく舞台を張り廻り叩いて一席。神田織音さんによる「講談で語る成年後見制度」、第一話の始まりだ。

認知症や重度の障害などによって判断能力が不十分な人の財産管理や身上監護を支援する「成年後見制度」。この制度を伝えたいと、横浜市社会福祉士会（須田幸隆会長）と織音さんが台本を練り、2006年12月に初披露した講談が新聞に掲載されるや大きな反響を呼んだ。

織音さんは今、東京の講談界の若手として古典や新作を上野広小路亭や国立演芸場、日本橋亭などで口演する傍ら、北海道から九州まで、社会福祉士会や社会福祉協議会、地域包括支援センター、福祉施設などが主催する高座に招かれ、全国行脚の真っ最中だ。

「ここまでニーズがあるとは思わなかったんです。成年後見の講談が私の講談の一部になってくれたらいいと思っていたんですが、あちこちから声をかけていただいて、これが本業ぐらいの勢いに。目的は制

度を知ってもらうこと。講談という伝統話芸はいい方法なのだと、私自身、改めて感じています」

人生をかけて話す講談 テーマを必死に探していました

高校時代から芝居を始め、卒業後アルバイトをしながら「食べていける女優」を目指していた1999年、織音さんに転機が訪れた。

「芝居小屋のスタッフがいつまでも売れない私を見かねたのでしょうか（笑）。講談はどう？ 今度、神田香織という人が演るから見に来ないかと誘ってくれたんです」

演目は「秋色桜」という義孝行物。

わかりやすい話だったこともあるが、女性の講演師として活躍する香織さんに惹きつけられた。

「まるで一人芝居のようでした。講談なら10年やってきた芝居の勉強が生かせるかもしれない…。しかも師匠（香織さん）はお子さんを育てながら高座に立ち、スポットライトを浴びている。当時まだ講談の魅力はわかっていなかったのですが、これは女が一生をかけられる仕事だと思ったんです」

すぐさま香織さんに弟子入りした。師匠は古典の手ほどきをしなから、同時に「あなたならではの代表作を作りなさい」と説いたという。

▼講談全3話。残りの2話は朝談による特別会の思い出。この日は東京・板橋区の「介護保険制度をよくする会」（朝談代表）の高座で一席



★休日の過ごし方 …… 映画が好き。「クワイエットルームにようこそ」（松岡スズキ監督）が面白かったです。

